

タイトル	異文化と人類学・博物館(<特集>共同研究報告：『国際化=異文化理解に関する方法論的研究：文化障壁を緩和するための効果的施策確立に関する考察』)
著者	須田，一弘
引用	北海学園大学人文論集，4：95-109
発行日	1995-03-31

# 異文化と人類学・博物館

須田 一 弘

## 1. はじめに

私が担当している文化人類学では、1年間の講義の終わりに、私自身が調査をしているパプアニューギニアのクボやキワイの話をスライドとともに紹介することになっている。それまでこまぎれに学んだ理論とは別に、実際に人類学者がどのようにフィールドで暮らしているかを知ってもらうためにである。講義が終わってどんなつまらないことでもよいからと質問を受け付けると、おずおずといくつかの手があがる。それまでの講義では質問が出ることは滅多になかったが、スライドを見て自分達の生活とクボやキワイのそれとの大きな違いに少なからずカルチャーショックを受けているようだ。しかし、そこで出てくる質問は私をうちのめす。「ニューギニアの人たちの暮らしは、日本でいうとどの時代に相当するのか」、「数は勘定できるか」。フィニッシュブローは、「進化の度合いから見ると、我々とはどのくらい離れているのか。」である。質問の答として、それまでの講義で教えた「文化相対主義」、「文化進化論の理論的誤謬」といったことを思いださせ、独立国であるパプアニューギニアがけっして石器時代そのままの暮らしを続けているわけではないこと、未開社会などではなくわれわれ同様現代に生きていることを強調して講義を終えるが、彼らがそのことをどれだけ理解しているかについては自信がない。

大学教育の場やマスコミで、「国際化」や「異文化理解」が唱えられるよ

---

この研究は1993年度北海学園学術研究助成を受けて実施された共同研究「国際化＝異文化理解に関する方法論的研究——文化障壁を緩和する効果的施策確立に関する考察」の一部である。

うになって久しい。これらの言葉が、人類の多様なあり方を知ることによって、人類の一般的な知見を得るとともに、自らの特殊性を知ることの意味するのであれば、ルソーの「人間不平等起源論」における問いかけがようやく実現したと考えることができる(谷, 1991)。しかし、日本における「国際化」、「異文化理解」の対象は、欧米諸国とりわけ旧西側先進国に限られているように思われる。日本は明治維新以降は「脱亜入欧」のスローガンのもと、また太平洋戦争敗戦後は占領国のアメリカを目標にめざましい経済発展を遂げてきた。しかし、だからといって、「国際化」、「異文化理解」が欧米の生活様式を模倣することを意味するとは限らない。むしろ、アジア、アフリカ、中南米、オセアニアなどの民族と文化を正しく知ることにより、自らの文化を相対化することのほうが求められよう。

異文化を知るためには、自らの文化を抜けて異文化へ飛び込むのがいちばん手っとり早い。しかし、そのような機会は、海外旅行が手軽になった現在の状況でもなかなか難しい。短期の休暇を利用して観光地を回る旅行では、自分とは異なる文化を持つ人びとと触れ合い、彼我の文化の差異を知る機会を得るのが困難であるためである。そこで、多くの人びとにとって異文化を知る機会は、新聞、雑誌、テレビなどのマスコミ、博物館や異文化を研究対象とする文化人類学者の仕事(論文やエッセイ、講義、講演)を通じてのものとならざるをえない。ところが、きわめて残念なことに、マスコミが取り上げる異民族、異文化は、予断と偏見による誤った情報になることが多いのも事実である(齊藤, 1992)。また、自ら省みると大学教育の場でも、苦手な理論を教えることに汲々として、異文化提示の方法と問題点にまで配慮がなされなかったきらいがなくはない。

さまざまな文化を対象としその比較研究を目的とする文化人類学にあつては、間文化的体験を記述し分析する方法についてこれまでも議論されてきた。とくに、1970年代以降には、それまでの客観的科学的民族誌に対する懐疑から、多様な実験的民族誌が書かれている(マーカスとフィッシャー, 1989; 松田, 1991等)。また、異文化の中での人類学者のあり方やインフォーマントとの関係に対する問い直しの作業も進みつつある(関本,

1988；安溪，1991；松田，1991；菅原，1994 等)。これらの重要な問題を論じる能力が私にあるとは思えないが，少なくとも，異文化を研究するものの一人として，ここで異文化の経験を伝えることの意味を考えてみたいと思う。

異文化を知る機会を提供しているメディアには，前述のようなマスコミや研究施設等があるが，その中でもいわゆる民族学系博物館は，独自の研究活動を進める一方で展示や種々の事業を通じて多くの人びとに異文化を提示することを主たる目的としている。日本では，1977 年に大阪府吹田市の万博跡地に国立民族学博物館が開館したのに続き，1983 年には野外民族博物館リトルワールドが愛知県犬山市に開館し，世界各地の民族と文化の紹介におおいに貢献してきた。また，1991 年には北海道網走市に北方地域の諸民族を対象とした北海道立北方民族博物館も開館した。この小文では，異文化の研究と提示という目的を持ったこれらの民族学系博物館を手がかりに，文化人類学において異文化を伝えることについて考えたい。

## 2. 博物館における展示方法の変遷

博物館が現在のように大衆に開かれたものとなったのは，それほど古いことではない。Ames (1992) により博物館の役割の変化を概観すると，博物館の嚆矢は王宮や教会・聖堂のコレクションに求めることができる。中世ヨーロッパにおいては，探検家や宣教師が各地から持ち帰った珍奇な記念品やみやげ物などは，そのスポンサーであった王侯貴族や教会に贈呈され，彼らのキャビネットに納められた。これらのエキゾチックなコレクションが意味することは，その所有者の威信や名声がいかに世界中にあまねく知れ渡っているかということであり，異文化から持ち帰られた個々の収蔵品が当該社会の中でどのような役割と意味を持っているかはあまり問題にされなかった。したがって，キャビネットの中の収蔵品は秩序だって整理，分類されていたわけではなく，また，異文化を伝えるために多くの人びとに紹介されることもなかった。すなわち，世界各地から持ち帰られ

た品々は、もっぱら支配階級に属するごく少数の人びとにのみ開かれていたわけである。

ところが、ルネサンスと大航海時代以降、異文化から持ち帰られた品々は個人的コレクションから公的なものへと変化するようになる。コロンブスやヴァスコ＝ダ＝ガマ、マゼランらによる航路の発見により、ヨーロッパ人の行動範囲が飛躍的に拡大した。そして、植民地の拡張やキリスト教の布教のため、多くの探検家や宣教師がこれらの地域を訪れることになった。すなわち、異文化接触の機会が飛躍的に増加したわけである。彼らが持ち帰った記念品やみやげ物は数量、複雑さともに増大したため、コレクションを収蔵するための建物とその管理が必要になってきたのである。

また、活版印刷の発明、ラテン語によらない母国語による教育の普及、産業革命にともなうブルジョワジー・中産階級の台頭、民主主義の発達などがあいまって、それまで支配階級に独占されていた知識がより広く普及していくことになった。こうしたなかで、探検家や宣教師がもたらした異文化に関する知見や品々は、ヨーロッパ社会に大きな影響を与えた。文化・社会の多様性を知るにつれ、人間や社会の性質、人間の行動の原因、人間性のたどってきた道筋などが議論されるようになり、そのなかで、ルソーをはじめ多くの思想家が異文化をてがかりとしてこれらの問題を論じることとなった。

こうした流れの中で、王侯貴族や教会の個人的コレクションは、専門家によって管理運営される組織的な博物館へと姿を変えていき、欧米では19世紀半ばまでには民族学系博物館がその体裁を整えるようになっていた。また、この時期は文化人類学（民族学）が大学で講じられ、学問として確立されるようになった時期でもある。かつて所有者の威信を示していたエキゾチックなコレクションは、博物館に展示され公共物となることで大きくその意味を変えていった。すなわち、これらの品々はその所有者にとってどのような意味を持つかという見方から、見学者がそれにどのような意味を見いだすかという見方に代わったのである（Ames, 1992）。

ただし、この時代の博物館は見学者として現在のようにすべての人びと

を対象としていたわけではなく、高等教育を受けた限られた数の人びとを受け入れていたにすぎない。また、収蔵品を整理・分類して展示するということは、それらの品々を博物館のスキーマのもとに秩序化するということを意味する。博物館自体の解釈により秩序化された展示物を見て、見学者が自由に解釈することは事実上不可能に近いことが多い。当時の民族学系博物館が採用していた展示方法は、文化人類学の主流であった文化進化論の影響のもとに、収蔵品を進化の発達段階や地理的起源に応じて並べるものであった (Ames, 1992)。ここでは、アフリカやオセアニア等からの収集物はそれらの社会の未開さを表すものとして取り扱われていたのである。

19世紀末から文化人類学調査の進展にともない文化進化論の枠組みが批判されるにつれて、博物館における展示方法にも変化が生じた。とくに、アメリカ合州国ではアメリカにおける文化人類学の創設者ボアズの指揮のもと、シカゴ野外博物館やニューヨーク市のアメリカ自然史博物館などで新たな展示法が試みられた (Ames, 1992)。すなわち、収集物を、それが本来置かれていた社会の文化的文脈を重視し、それを模したセッティングの中に配置し、展示するというものである。展示物はそれぞれの社会の生活様式を伝えるものとなり、展示物はその中でのみ意味を持つ。さらに、ここでは博物館における資料収集と展示の目的は、異文化理解と文化人類学への貢献にあるのである。

しかし、こうした方法を批判する考えもある。文化的文脈を重視し、収集品が実際に使用されている状況を再現したセッティングの中で展示したとしても、それは展示デザイナーの芸術的才能の助けを借りて、人類学者自身の精神世界を再構成しているにすぎない。これらの展示は、収集品が置かれていた文化的文脈について語るよりも、現代の展示技術の優秀さを示しているだけであるというのである。むしろ、社会的文化的文脈を離れて、西洋社会の美術・芸術と同様に審美的価値に基づいて判断すべきであるという主張である。これら様々な博物館のあり方を概観した上で、Ames (1992) は、異文化からの事物を見て、それについて考える方法とし

てはいずれも共通の問題点を有していると指摘している。第一に、いずれのアプローチも、異文化からの事物をより広範な知的枠組みの中で、比較を目的として位置づけようとしており、そこからゆがみが生ずる恐れがあること、第二に、収集され展示される事物は、その文化の中のほんの一部にすぎず、けっしてその社会や文化・歴史の全体を表すものではないこと、第三に、いずれの場合も部外者の視点による収集と展示であること、である。

以上の点をふまえ、Ames (1992) はこれまでの展示方法に代わるものとして、内部の者の視点 (insider's point of view) からの展示を提唱している。博物館に収蔵された事物を作り、使用していた人びとがそれをどのように解釈しているのか、また、どのような展示を望んでいるのかを第一に考慮し、博物館の専門家とともに展示のあり方を模索する方法である。しかし、内部の者の視点といっても、当該社会の成員すべてが同じ考えを持っているわけではない。その社会の内部においても、ある事物についての解釈が成員により異なる場合もある。また、自らの文化を他者に提示することに積極的に意義を見いだす成員もいれば、それに消極的な成員もいる。こうした当該社会内部の多様な意見を調整しつつ、新たな展示方法が博物館の専門家と展示される側の人びととの間で試みられつつある。

また、大英博物館人類博物館長のマック (1994) は、博物館の活動を文化の搾取の活動、あるいは事物を展示される側の人びととそれを展示し鑑賞する人びととの関係を切断するものとしての「領有の行為」(Acts of Appropriation) であるとする批判をふまえ、それを乗り越える視点として、博物館の活動を「翻訳の行為」(Acts of Translation) と位置づけることを提唱している。ここでいう「翻訳」とはある単語を別の単語に置き換える作業ではなく、「表現の意味と精神を伝達する、言語形式とイメージの、適切なセットを探し求める作業」(マック, 1994: 7) を意味している。博物館では、事物の展示を通してこの複雑な、創造的洞察と構成が要求される作業を行うべきであるというのである。そのなかで観覧者は、展示された事物に身構え、驚き、考えることで、既存の前提の再生産ではなく、

それへの挑戦が可能になるのである。

さらに、博物館の役割自体も大きく変化している。かつては高等教育を受けた一部の人びとのみを対象としていたが、現在ではすべての人びとを対象とするように、すなわち博物館の大衆化の時代になった。そのため、ほとんどの博物館がより多くの来館者を迎えるために、さまざまな努力をするようになってきている。いわば、コレクションや博物館の所有者が一部の支配階級から高等教育を受けた者へ、そして大衆へと移り変わってきたわけである。ボアズの時代の博物館の役割は調査と資料収集、研究成果の出版が主であり、それに基づいて一般への啓蒙が行われた。すなわち、博物館は科学の発展のためのものであり、博物館の専門家すなわち学芸員は研究者としての役割を負うだけであった。ところが、知の民主化が進むなか、大衆は研究者の生み出した知を共有する権利を持つという考えが一般的になるにつれ、博物館も大衆の要求に応じたものにする必要が生じたのである。政府や地方自治体が設立した博物館が国民の税金で運営されていること、また、民間の博物館の運営も入場料に多くを依存していることを考えると、これはもったもなことである。

科学の発展のためという金科玉条が通用しなくなったのは、博物館に限ったことではない。文化人類学調査においても、それが調査される者にとどのような利益をもたらすのかが問われるようになってきており（安溪，1991）、多くの国や地域で、研究者の学問的関心のみを目的とする調査計画が拒否される事態も生じている。研究者自身の学問的関心、あるいは立身出世のために第三世界の伝承や文化遺産を収奪していくのは、知の帝国主義、植民地主義にほかならないというのである。ましてや博物館においては、事物の収集が伴うわけであるから、対象社会の人びとに対する配慮は当然必要になってくる。これは、前述した内部の者の目からの展示に通じるものがある。

博物館の役割の変化の中で、博物館で働く専門家である学芸員の役割も、それまでの研究を主としたものから、大衆へのサービスと運営のための行政手腕をも考慮にいれたものへと変化している。また、資料の収集におい

ても対象社会の人びとの視点を考慮に入れる必要もある。しかも、研究と大衆へのサービスや行政とはしばしば相容れない場合も多い。こうした状況において、日本の民族学系博物館が具体的にどのような方策を取りながら、調査研究と展示や大衆へのサービスを両立させているのかを次節で考えたい。

### 3. 日本における民族学系博物館

日本における大型で本格的な民族学系博物館としては、大阪府吹田市の日本万国博覧会記念公園にある国立民族学博物館と、愛知県犬山市にある財団法人野外民族博物館リトルワールドのふたつが代表的である。国立民族学博物館は、40,821 m<sup>2</sup>の敷地面積に延べ面積44,763 m<sup>2</sup>の建物を擁しており、1994年4月1日現在で標本資料206,939点、映像・音響資料54,838点、文献図書資料393,024冊を収蔵し、1993年度には283,968人が訪れている(国立民族学博物館要覧1994より)。リトルワールドは、1,230,000 m<sup>2</sup>という広大な敷地を有しており、標本資料は1992年度末で40,259点にのぼっている。1992年度の入場者数は623,276人である(リトルワールド年報第15号1992年度より)。このうち、国立民族学博物館は、構想から15年間を経て1977年に開館した。いっぽう、リトルワールドは、これも構想発案から15年後の1983年に開館している。ともに構想発案から開館にかけての時期は、日本における民族学・文化人類学の発展期と重なっており、このことが両博物館の開館に影響を与えたことは否めない。また、高度経済成長を経て海外渡航者が増加したことや、それにとまなう異文化・異民族への関心の増大も見のがすことはできない。

ふたつの博物館の活動をみると、ともに民族学調査や資料収集を中心とした研究活動、展示活動、民族学・文化人類学に関する認識と理解を深めるための講演や講習会などの広報活動のみつつに大別される。展示活動では、ともに映像・音響資料を活用し、展示物が当該社会の中でどのように具体的に利用されているかを示す工夫をしたり、常設展の他、特別展示や

テーマ展示を企画し、急激に変化する国際状況に応じた展示を行っている。

しかし、個々の活動の具体的内容には、両者の運営主体の差異を反映していくつかの相違点がある。国立民族学博物館は、大学共同利用機関として、国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和49年法律第81号）により設置されたものであり、国家予算によって運営されている。その研究部は68名（定員）の教授、助教授、助手の文部省教官から構成されている。また、博物館を基盤とする総合研究大学院大学の博士後期課程が設置されており、研究部の教官はこの大学院の文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻の大学院生にたいする教育をも担当している。また、民族学・文化人類学を専攻する研究者の共同利用機関として、毎年30前後のテーマごとに共同研究会を主催しており、民族学・文化人類学の研究センターの役割を担っている。こうした性格上、活動の主体は研究におかれており、よい研究の成果がよい展示に表れると考えられている。

いっぽう、野外博物館リトルワールドの運営主体は財団法人であり、入館料等の収入を中心として運営されている。したがって、国立民族学博物館と異なり来館者の確保が大きな意味をもつことになる。異文化・異民族に関する情報の提供という役割に加えて、娯楽性を持った展示・施設が必要となるわけである。そのため、リトルワールドでは広大な敷地に野外展示場を設け、そこに世界各地から移築・復元した29施設50棟の家屋を配し、実際に家屋に入りそれに触れることが可能な展示を行っている。さらに、いくつかの家屋では、現地から招いた人びとによる伝統芸能の実演や、民族衣装の貸し出し、民族料理や飲物を楽しむことのできるレストランを併設している。入館者にたいするこれらのサービスの効果もあって、リトルワールドを訪れる人は国立民族学博物館の二倍を越えている。

上記のふたつの博物館ほど大規模ではないにしても、カヌーや耳飾りなどにテーマを絞り独自の特徴を持った博物館が、近年になって地方自治体などによって開館されるようになってきている。なかでも1991年に網走市に開館した北海道立北方民族博物館は、北方地域の諸民族の文化に焦点をあてた、地域に根ざした博物館といえる。博物館としての活動は国立民族学博

博物館のそれに準じており、独自の研究・展示・広報活動を行っている。

これら日本の民族学系博物館は、前節で触れた現代の博物館が直面している問題にどのように対処しているのだろうか。いずれの博物館も、珍奇なモノを展示するというのではなく、世界の諸民族の社会と文化を理解することを目的としている。また、展示される側の人びとにたいする配慮もされるようになってきている。これらの博物館における収蔵・展示物は、それまで私的、公的に集めてきたコレクションをもとに、開館準備期間から世界各地で収集したものである。それまでに集められていたコレクションは別として、各博物館が新たに収集した品々は、調査対象社会からの文化や事物の略奪や搾取にならないように配慮がなされている。あくまでも商業ベースにのったものを中心に購入しており、貴重なものについてはその複製を収集・展示するにとどめていることが多いという。また、展示される側の人びとの博物館活動への参加としては、リトルワールドの場合、野外展示場の家屋復元の際、現地から材の運搬や技術者を招いて行うことがあり、入館者は家屋の復元や修復のプロセスをも観覧することが可能となっている。北方民族博物館では、一般の人びとを対象とした講習会に、アイヌの人びとを講師として招き、アイヌに伝わる生活の知恵の伝承に貢献している。

しかし、展示される側の人びとが具体的に展示に関わることは、残念ながら達成されていないような気がする。実際的な問題として、遠方の地域に住む人びとが日本の博物館に経常的にどのように関わっていくことができるのかは、きわめて難しい問題といえよう。ただし、北方民族博物館のように地域との結びつきが強い博物館の場合には、アイヌの人びとや北方諸国の人びとが展示に参画することは比較的容易であると考えられる。そのことは北方民族博物館設立の趣旨にある国際交流の振興にも役立つことにもなる。また、国立民族学博物館や北方民族博物館のように研究を主とする博物館においては、娯楽性と科学の両立は、今後の入館者数の増加にとってはおおきな問題となるのではないだろうか。

#### 4. 博物館と人類学

民族学系博物館と文化人類学はともに、世界の諸民族の社会と文化を研究対象とし、人間についての認識と理解を深めることをおおきな目的とするという共通点をもっている。また、その成立の時期や経緯をみても共通するところがおおい。実際、初期の人類学者は博物館に籍をおくことがおおかたなのである。しかし、調査・研究の成果を人びとに伝えるという点では、博物館の方がはるかに多くの人びとを対象としている。人類学者が対象とするのは、多くの場合、自分の大学の学生に限られており、研究成果も専門家を対象とした学術論文になる場合が多い。しかし、だからといって、大学に籍を置く人類学者が多くの人びとに異文化を伝えるということについて、それほど関わらなくてもよいということにはならないだろう。

齊藤（1992）も指摘するように、新聞やテレビなどのマスコミで取り上げられる異文化についての情報は、予断と偏見にみちたものであることが多い。そのほとんどは、世界の諸民族を文化の進化の度合いによって位置づけようとすることから生じている。アフリカやオセアニア、南米などに暮らす民族は、欧米や日本などの先進諸国に比べ、いまだに未開な段階にあるという考えが前提となっているのである。文化進化論に基づく偏見は、彼らを好意的に取り上げようとする場合にも表れる。“未開に生きる人びとは、先進国に暮らす我々が、進んだ文明を享受することと引き換えに失った何かを、今も持ち続けている”と表現されることが多いのである。そこにあるのは、“文化の進歩によって物質的には豊かになったが精神的には貧しくなったわれわれ（先進諸国）”と、“物質的には貧しいが精神的には豊かな彼ら（未開社会）”という図式である。これは、とくにニューギニア（パプアニューギニアとインドネシア西イリアン州）を取り上げる場合に顕著である。齊藤（1992）は、新聞に取り上げられたニューギニアの記事を検索すると、いくつかの記事の中に「石器時代」や「原始社会」、「裸族」といった言葉がよく使われていると指摘している。

19世紀後半の人類学の主流であった、世界の諸民族・文化を、そこにみ

られる諸制度や事物の進化の度合いによって一直線上に位置づけよう（欧米の近代文明は当然文化進化の頂点にあると仮定される）とする単系的文化進化論の考え方は、20世紀に入り現地調査が進むにつれ否定されるようになった。本来、生物の種の変異を説明しようとした進化論を、生物学的に単一種である人類の文化の多様性を説明するために用いるのには無理があったのである。にもかかわらず、民族・文化をいまだに進化との関連で“遅れた”とか“進んだ”と表現する傾向が存在するという事は、民族学・文化人類学の考え方が一般にほとんど浸透していないということの意味している。

いままで人類学の内部において、研究成果の一般への還元が真剣に議論されたことはそれほど多くはない。しかし、知の大衆化、民主化が唱えられる現代にあっては、人類学者が異文化と、異文化にたいする考え方を伝えることに取り組む必要があることは明かである。また、人類学が自分とは異なる文化に属する人びとを対象としている以上、博物館における事物の収集に関して要請された、対象社会の人びとへの配慮が必要であることはいうまでもない。いくつかの博物館で行われている、展示される側の人びととの共同作業から生み出される展示は、この点でおおいに参考になるのではないだろうか。だが、具体的にどのような方策を用いて異文化を伝えるのかは、容易に解答の見いだせる問題ではない。現在の段階では、多くの共通点を持つ博物館の諸活動を参考に、人類学を実践する中でその答を見つけることが出発点というしかあるまい。

## 付 記

異文化を伝えるということにはさまざまな問題を含んでおり、正直なところ私にとって荷の重すぎるテーマであった。この小文は、この大テーマを扱うにも関わらず博物館に関するきわめて限定的な調査にしか基づいておらず、その調査にしてもごく短期間のものであった。本来、異文化を伝えるという問題を扱うためには、他者を表象する上での認識論上の問題を

避けて通るわけにはいかない。また、人類学や博物館を対象とする以上、サイードが「オリエンタリズム」（1978）で提起した知識と権力との関係の考察抜きで語るのには配慮にかけるといってよい。いわゆる第三世界に属する国々に、いわゆる先進諸国の文化を伝えるための博物館というものは存在しないし、第三世界の人類学者が先進国の社会・文化を研究するということがほとんどないからである。にもかかわらず、このような拙速を認めない小文を書くことになったのは、ひとえに研究費の補助に対するオブレーションに責められたにほかならない。この小文には多くの問題点、未熟な点があるとは思いますが、皆様のご寛恕を乞う次第である。いずれ、異文化と人類学者の関係について、この小文で取り上げることのできなかった問題や、人類学における現地調査の問題を、研究費の補助とそれに伴う義務の問題も含めて考え直してみたい。

博物館の問題を考えるにあたっては、国立民族学博物館の秋道智彌助教授、野外民族博物館研究員の高橋貴氏、同じく亀井哲也氏、北海道立北方民族博物館学芸課長渡部裕氏、同じく学芸員佐々木亨氏と齋藤玲子氏にお世話になった。お忙しい時間を割いてお相手していただき、数々の貴重な資料をくださったことに感謝するとともに、このような形でしかまとめることのできなかったことを深くおわび申し上げます。

## 引用文献

- Ames, M. M. (1992) *Cannibal Tours and Glass Boxes*. Vancouver: UBC Press.
- 安溪遊地 (1991) 「される側の声—聞き書き・調査地被害—」 民族学研究 56 卷 3 号：320—326.
- ジョン・マック (Mack, J.) (1994) 「翻訳の行為」 (栗本英世訳) 民博通信 66：2—21.
- ジョージ・E・マーカス, マイケル・M・フィッシャー (Marcus, G. E. and M. M. J. Fischer) (1989) [1986] 「文化批判としての人類学」 (永渕

康之訳) 紀ノ国屋書店

松田素二(1991)「方法としてのフィールドワーク」米山俊直, 谷泰編「文化人類学を学ぶ人のために」世界思想社: 32-45.

斎藤尚文(1992)「マゼランが死んだ,あるいは石器時代に閉じこめられたパプアニューギニア人」中京大学社会学部紀要7巻1号: 1-18.

関本照夫(1988)「フィールドワークの認識論」伊藤幹治, 米山俊直編「文化人類学へのアプローチ」ミネルヴァ書房: 263-289.

菅原和孝(1994)「ひとりのグウィの女が死んだ」井上忠司, 祖田修, 福井勝義編「文化の地平線」: 393-413.

谷泰(1991)「文化の森に近づく人のために」米山俊直, 谷泰編「文化人類学を学ぶ人のために」世界思想社: 231-258.

## Other Cultures, Anthropology, and Museums

Kazuhiro SUDA

### Abstract

This paper examines how other cultures are represented in anthropology and ethnological museums, even though the epistemological examination of representing the Other and the examination of the relationship between knowledge and power remain to be proved. Ethnological museums as a medium of other cultures has been changed in philosophy and style: from the supremacy of science to the modern exhibitions which consider popularization, an “insider’s point of view” and “Acts of Translation.” At the same time, anthropology in universities might be insensitive about the way it imparts information regarding other cultures to the public.